

【現代語訳】

【道成】 私は一条の院（一条天皇）にお仕えする橘道成でございます。まさに今夜、帝は不思議なお告げを受けられて、三条の小鍛冶宗近に命じて剣を造らせよとのことであります。私は帝のご命令を受けて、

今、宗近の私宅に急いでいるところです。

【宗近】 「おい、この家に宗近は居るのか。」

【宗近】 「宗近、と呼ぶのは、どなたがお越しになったのか。」

【道成】 「私は一条院の、帝の勅使だ。まさに今夜、帝は不思議なお告げを受けられて、宗近に命じて剣を造らせよとのことであった。それで、急いでここに来たのだ。」

【宗近】 「帝のご意向は畏まって承りました。しかし、そのような剣をお造りするには、私と同じ位いの技量のある相槌を打ってくれる者がいないと出来ません。今はそのような者はここに居ないのです。ですから、今はご返事を申し上げることが出来ません。」

【道成】 「いやあ、確かに、お前が言うところは、道理ではあるが、帝は不思議なお告げを受けられて、お前を信頼してのご意向なのだよ。帝のご命令が出た以上は、今すぐに了承を下さい。」

【地】 「ああ確かに怪しいかもしれないけど、我のみが知っているという事は、

「ああ確かに怪しいかもしれないけど、我のみが知っているという事は、

「ああ確かに怪しいかもしれないけど、我のみが知っているという事は、

「ああ確かに怪しいかもしれないけど、我のみが知っているという事は、

「ああ確かに怪しいかもしれないけど、我のみが知っているという事は、

「ああ確かに怪しいかもしれないけど、我のみが知っているという事は、

「ああ確かに怪しいかもしれないけど、我のみが知っているという事は、

「ああ確かに怪しいかもしれないけど、我のみが知っているという事は、

「ああ確かに怪しいかもしれないけど、我のみが知っているという事は、

「ああ確かに怪しいかもしれないけど、我のみが知っているという事は、

「ああ確かに怪しいかもしれないけど、我のみが知っているという事は、

「ああ確かに怪しいかもしれないけど、我のみが知っているという事は、

「ああ確かに怪しいかもしれないけど、我のみが知っているという事は、

「ああ確かに怪しいかもしれないけど、我のみが知っているという事は、

「ああ確かに怪しいかもしれないけど、我のみが知っているという事は、

「ああ確かに怪しいかもしれないけど、我のみが知っているという事は、

「ああ確かに怪しいかもしれないけど、我のみが知っているという事は、

「ああ確かに怪しいかもしれないけど、我のみが知っているという事は、

「ああ確かに怪しいかもしれないけど、我のみが知っているという事は、

「ああ確かに怪しいかもしれないけど、我のみが知っているという事は、

「ああ確かに怪しいかもしれないけど、我のみが知っているという事は、

いずれ他者まで知れるということさ。」

【宗近】 「天に声があれば。」

【童子】 「それは地に響く。」

【地】 「それは地に響く。」

壁に耳あり、岩が物言う世の中。そう、岩が物言う世の中だから、誰が知っ

ているかも分らないし、隠し事は露見するものだ。殊に、雲の上の人である

帝の剣のことならば、その光をどうして闇に隠せようか。ただひたすら帝

の天意を頼むしかあるまい。そうすれば奉納する剣は、帝の心に叶うもの

になるだろう。いや、どうして叶わぬことがあるうか。

【クリ】（能における、「クリの段」(まとまった情景区分)の歌の演奏)

「ああ、帰りたいなあ」と思われて、「いつの日か、我も、あの波のように

袖を返して帰りたいものだ」と思い続けながら、旅をされてきました。

【童子】 「様々な土地での戦に。」

【地】 「人馬は敵地の険しい岩山に苦闘し、「涿鹿の戦い」のように、傷ついた血は

川のように流れて、その血潮に桶も流してしまうという激戦が数度に及んで

ついに夷狄も兜を脱ぎ、牙を地に伏せて、「皆降参します」と言ってきた

【童子】 「死しても皇帝の剣に自身の魂魄(死者の魂)を込めて皇帝に仕え、

【地】 「悪霊、鬼神に至るまで。」

【童子】 「突然、敵が四方を囲み。」

【地】 「突然、敵が四方を囲み。」

【童子】 「突然、敵が四方を囲み。」

【地】 「突然、敵が四方を囲み。」

【童子】 「突然、敵が四方を囲み。」

【地】 「突然、敵が四方を囲み。」

【童子】 「突然、敵が四方を囲み。」

【地】 「突然、敵が四方を囲み。」

【童子】 「突然、敵が四方を囲み。」

【地】 「突然、敵が四方を囲み。」

【童子】 「突然、敵が四方を囲み。」

【地】 「突然、敵が四方を囲み。」

【童子】 「中国でも我が国でも、剣にまつわる神仏の加護は、」

【地】 「言葉では表わし方が無い、奇跡の力を持つものである。」

【クリ】（能における、「クセの段」の歌の演奏)

「えまた、我が朝廷が始まってから、十二代の景行天皇の時、

お名前を日本武尊とおっしゃるのだが、東国の敵(蝦夷)を平定せよとの

帝の命令を受けられた。尊は、逢坂の関所より遙か東への遠征の旅途中

で、伊勢や尾張の地に広がる海を眺めて、立つ波が返ってゆく様子に、

「ああ、帰りたいなあ」と思われて、「いつの日か、我も、あの波のように

袖を返して帰りたいものだ」と思い続けながら、旅をされてきました。

【童子】 「様々な土地での戦に。」

【地】 「人馬は敵地の険しい岩山に苦闘し、「涿鹿の戦い」のように、傷ついた血は

川のように流れて、その血潮に桶も流してしまうという激戦が数度に及んで

ついに夷狄も兜を脱ぎ、牙を地に伏せて、「皆降参します」と言ってきた

【童子】 「死しても皇帝の剣に自身の魂魄(死者の魂)を込めて皇帝に仕え、

【地】 「悪霊、鬼神に至るまで。」

【童子】 「突然、敵が四方を囲み。」

【地】 「突然、敵が四方を囲み。」

【童子】 「突然、敵が四方を囲み。」

【地】 「突然、敵が四方を囲み。」

【童子】 「突然、敵が四方を囲み。」

【地】 「突然、敵が四方を囲み。」

【童子】 「突然、敵が四方を囲み。」

【地】 「突然、敵が四方を囲み。」

【童子】 「突然、敵が四方を囲み。」

【地】 「突然、敵が四方を囲み。」

【童子】 「突然、敵が四方を囲み。」

【地】 「突然、敵が四方を囲み。」

【童子】 「突然、敵が四方を囲み。」

【地】 「突然、敵が四方を囲み。」

【童子】 「突然、敵が四方を囲み。」

その時に、あなたに会って力を貸しましょう。待っていないさ。

【宗近】 「どうか力を合わせて下さい。」と祈願をし、「ぬき」を被って天を仰ぎ、

頭を地に付けて「心の底の底からの真心を、どうかお聞き入れ下さい」と、

【宗近】 童子はスーツと消えてしまいました。どこに行っただか分らず消えてしまっ

たのです。

【早苗】（雷の音に乗って、稲荷明神が現れる)

【地】 さあ、宗近、勅命の剣だぞ。さあ、宗近よ、勅命の剣を打つのだぞ。

【宗近・祝詞】 宗近は勅命に従って、設えた祭壇に昇りながら、不淨のものを寄せ付け

ないように結果の注連縄を七重に張り巡らせ、四方祭器の上に稲荷大明神本

尊の絵を置き掛け、幣帛を捧げ、かしまって祈願する。

【稲荷明神】 童子(稲荷明神の化者が段の上にあがり、

【地】 「私、宗近の代に至って歴代天皇は六十代にられます。

その一条院帝の御代に刀匠としての誉れを身に受けることは、私の力では

【宗近】 「中国や日本において、あなたの剣の威徳(靈験)の教えは、今の私にとっ

て何よりの励ましの祝詞です。さてさて、あなた様は一体、如何なる人なの

【童子】 「誰でもないではないか、ただ神仏に全託しなさい。

【地】 「天國の子孫に継がれて今に至っております。この祈願で願うところは、

【宗近】 「宗近の願いは、剣を造るのは自身の功名でなく、天下を統べられる帝の

【地】 「宗近の願いは、剣を造るのは自身の功名でなく、天下を統べられる帝の

【童子】 「宗近の願いは、剣を造るのは自身の功名でなく、天下を統べられる帝の

【地】 「宗近の願いは、剣を造るのは自身の功名でなく、天下を統べられる帝の

【童子】 「宗近の願いは、剣を造るのは自身の功名でなく、天下を統べられる帝の

【地】 「宗近の願いは、剣を造るのは自身の功名でなく、天下を統べられる帝の

【童子】 「宗近の願いは、剣を造るのは自身の功名でなく、天下を統べられる帝の

【地】 「宗近の願いは、剣を造るのは自身の功名でなく、天下を統べられる帝の

【童子】 「宗近の願いは、剣を造るのは自身の功名でなく、天下を統べられる帝の

【地】 「宗近の願いは、剣を造るのは自身の功名でなく、天下を統べられる帝の

【童子】 「宗近の願いは、剣を造るのは自身の功名でなく、天下を統べられる帝の

【地】 「宗近の願いは、剣を造るのは自身の功名でなく、天下を統べられる帝の

【童子】 「宗近の願いは、剣を造るのは自身の功名でなく、天下を統べられる帝の

【宗近】 「このようにして御剣を造り上げ、刀の表面に「小鍛冶宗近」と銘を打ち、

【稲荷明神】 童子は、化身の身による宗近の弟子であるので、「小狐」と刀の裏面に、

【早苗】（雷の音に乗って、稲荷明神が現れる)

【地】 こうして出来上がった奉納の剣は、刃が雲を乱したような模様となっ

ていたので、「天の叢雲」の剣も丁度このような剣なのであろう。

【稲荷明神】 「天下第一の剣である。」

【地】 天下第一の名刀は、二つの銘を持つ御剣であるから、帝がこの剣で天下を治

め給えば、五穀豊稔も間違いないのである。化身の狐の童子は、

【私】 「私は、お前の家系の神である稲荷明神である。」と、宗近に明かされた。

その神体とも言える靈剣「小狐丸」を帝の勅使に手渡されると、

【これまでである】と言いつけて、叢雲(霧)が立ち立って雲に飛び乗り、更に次々

と雲間に飛び乗って、あの東山稲荷の峯を指して、帰って行かれた。

【稲荷明神】 カーンと打つ。

【地】 チーンカーン／＼、チーンカーン／＼と打ち重なる鏡の音は、

【童子】 天地に響き渡って、ものすごい。

【地】 天地に響き渡って、ものすごい。

【童子】 天地に響き渡って、ものすごい。

【地】 天地に響き渡って、ものすごい。

【童子】 天地に響き渡って、ものすごい。

【地】 天地に響き渡って、ものすごい。

【童子】 天地に響き渡って、ものすごい。

【地】 天地に響き渡って、ものすごい。

【童子】 天地に響き渡って、ものすごい。

【地】 天地に響き渡って、ものすごい。

【童子】 天地に響き渡って、ものすごい。

【地】 天地に響き渡って、ものすごい。

【童子】 天地に響き渡って、ものすごい。

【地】 天地に響き渡って、ものすごい。

【童子】 天地に響き渡って、ものすごい。

【地】 天地に響き渡って、ものすごい。



今和三年七月二十四日

大中正比呂 拙訳